

Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Autumn/Winter 2018



国際観光映像祭「ART&TUR」@ポルトガル
(関連記事：2ページ)

Contents ー目次ー

1. Reports ー和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告を紹介ー
2. Topics ー過去のイベントとニュースー
3. Future Events ー今後のイベント紹介ー

■ 観光学部に来た意味 ～国際観光映像祭「ART&TUR」参戦記～

川島 拓さん (学部4年生 / 和歌山県立那賀高等学校出身)



ドバイで飛行機を乗り継ぎ、合計 18 時間を経てたどり着いた人生初のヨーロッパ。八日間に渡るポルトガル訪問の目的は、国際観光映像祭「ART&TUR」への参加でした。

有名どころではカンヌ国際映画祭や東京国際映画祭、ローカルなものでは田辺・弁慶映画祭や福井駅前短編映画祭など、世界各地で様々な映画祭・映像祭が開催されています。その中でも「観光映像部門」を有する映像祭が世界に 16 あり、cift という UNWTO 認証団体に属するひとつが、「ART&TUR INTERNATIONAL TOURISM FILM FESTIVAL」です。

開催 11 回目を迎えたこの映像祭が新たに立ち上げた企画が、世界各地からクリエイターを招集し、五日間で観光映像を制作するコンペ「ART&FACTORY」。この部門に日本代表として選ばれたのが、日本の観光映像研究の第一人者である木川剛志准教授であり、その制作スタッフの一員としてゼミ生である私も、ポルトガルに同行することとなったのでした。

ART&FACTORY に参加したのは、ブラジル、南アフリカ、インドなど全 6 チーム。城文化を中心に形成された Historical Village と、岩山での生活に根ざした Shale Village のどちらかを舞台とし、三分程度の観光映像を制作します。私たちは、すでに観光地化された場所ではなく、いわゆる田舎の村での新たな魅力を観光学部の視点から見つけ出すために、唯一後者の Shale Village を選択し、制作に臨みました。

和歌山大学チームは現地の人とのふれあいをコンセプトにしました。各村を巡り、文化と歴史を感じ、その土地の郷土料理を頂きながら、そこにいる人たちと言葉を交わす。ある程度観光地化されている村、そうでない村…決して着飾りすぎない、ありのままの生活が営まれていることの価値を、どのように映像に落とし込むかに頭をひねった五日間でした。

しかし残念ながら、コンペにおいては入賞することができませんでした。チーム内での擦り合わせが不十分でクリエイティブの難しさを痛感しましたが、勝算もあっただけに悔しい結果です。しかし、他チームの制作した作品や、映画祭本戦にエントリーしている作品を会場と一体になって観られたこと、観光映像に関するトレンドが意見交換されたカンファレンスに参加できたことは、「よい観光映像とはなにか」を研究テーマとする私にとって、また、これから映像業界に身を置いてゆく一人としても、非常に有益な学びとなりました。

さらに、CNN、ナショナルジオグラフィックといった世界で活躍するプロと直接お話しさせていただいたことは、大きな自信と経験になりました。人に対する温かさや映像に対する真摯な姿勢を併せ持つ姿に、ただただ感動するばかりでした。また、私自身は英語があまり得意ではありませんが、拙い英語であっても、同じテーマのもとで何かを伝えたいという想いがあれば、お互いが歩み寄ることで必ず繋がることのできるのだと感じました。

今回の機会をいただいた木川准教授、和歌山大学、サポートして下さった観光実践教育サポートオフィス、CTR、そしてポルトガルでお世話になった全ての方に感謝いたします。「観光学部に来た意味」を実感することができた、ポルトガルの旅でした。



■ 日韓ジュニアフォーラム

姜 愛美さん (学部2年生 / 大阪府立今宮高等学校出身)



私は大学一年のころから韓国と日本に関する国家間の青少年交流事業である JENESYS や、今年の 3 月からの大邱への留学など、様々な形で日韓交流を行ってきました。そして、今年の夏には日韓ジュニアフォーラムに参加させていただくことになりました。このフォーラムは 1993 年の日韓首脳会談での合意に基づき設置された、民間レベルの政策協議のためのフォーラムである日韓フォーラムのサイドイベントです。大人たちのシニア世代だけで話し合うのではなく、これから日韓関係を背負って行く若者、次世代の責任者の意見を取り入れようという目的で 2015 年から始められました。毎年韓国と日本の交互で会議を開催しており、今年の第 26 回日韓フォーラムは東京で開催されました。

ここでは日本と韓国の国籍を持つ各 10 名の計 20 名の大学生・大学院生が集まり、4 つのグループに分かれ 2 時間ほど話し合った後、日韓フォーラムの場でそれぞれの議題の内容をグループの代表者が発表するというものでした。

今回は「人的交流」、「政治と外交」、「歴史と未来」、「在日と移民」というテーマに分かれ、その中での問題点と、それを踏まえてシニア世代の方々への提案をそれぞれのグループが討論しました。

私は「在日と移民」のグループに入り、在日の二重国籍不認可や朝鮮学校補助金の問題、移民への排外的な態度や制度の不足の問題をグループの代表者として発表しました。

その場には日本の文部科学大臣、日韓経済協会の理事をはじめとする政治・経済を代表する方々や、毎日新聞、NHKなどの主要なメディアの方々、日韓の大学教授などの有識者の方がいらっしやり、私たちの発表に対しての意見や補足を発表後にしていただきました。私が担当したテーマに関しては林文部科学大臣（当時）と二人でお話する機会もいただき、政府の考え方を直接聞くことができました。

また、フォーラム参加者とジュニアフォーラム参加者が合同で議論をするセッションもあり、そこでは日本と韓国が抱える少子高齢化問題や社会保障問題についてそれぞれの立場からの課題や将来の解決方法を話し合いました。

最後に、この有意義で貴重な会議に招待していただき、サポートして下さった日韓文化交流基金と日本国際協力センターの方々に感謝を申し上げるとともに、これからも日本と韓国についての知見を深め、もっと活発に日韓に関する活動をしていきたいです。



■ PATA 和歌山大学学生支部 2018 年度前期活動報告

伊藤 蒼一郎さん（学部3年生 / PATA 和歌山大学学生支部 代表 / 北海道札幌旭丘高等学校出身）

2016年に国際観光組織であるPATA（Pacific Asia Travel Association）の学生支部として日本で初めて設立された、私たちPATA 和歌山大学学生支部は今年で3年目を迎えます。今年度前期は、世界と地域の両者を考える活動を行ったのでそれについて報告したいと思います。

5月、韓国のカンヌン（江陵）で行われたPATA Annual Summitに参加しました。世界の旅行会社や観光省の人など、世界の観光産業を支える人が一堂に会しました。サミットでは世界の観光を取り巻く、オーバーツーリズムやデジタル化などの諸問題について、企業・行政両方の立場からパネルディスカッションを行っているのを公聴しました。また、他国の学生支部（中国・フィリピン・カナダなど計50名ほど）と初めて交流し、自分たちもPATAの一員なんだということを改めて認識することができました。サミット中の使用言語は英語のみで、正直コミュニケーションに苦しんだ場面もありましたが、メンバー同士で助け合いながら活動を終えることができました。また、授業では聞いたことがない観光業の現状を聞き、自分たちの勉強不足を痛感する機会でもありました。

7月には徳島へ「食」をテーマにした研修旅行をしに行きました。徳島の地鶏を使った地元レストランや徳島ラーメンなど、食べ物を通じて徳島を楽しみました。旅行をした感想としては、交通インフラが十分に整備されておらず、素敵な観光資源があるのもったいないというのが一番でした。また、意外なことに地元住民が多く乗るローカル線にも外国人観光客が乗っており、インバウンドの地方への分散を肌で感じました。旅行後、私たち自身で徳島の観光を盛り上げるビジネスプランを考えました。ヨーロッパの家族連れをターゲットにしたプランや教育体験旅行を活用した旅行など、色々なアイデアがあり、メンバー同士でも非常に勉強になりました。



世界的な観光客の増加に伴い、日本でも多くのインバウンドが見られます。彼らが地域へ行くことで経済的な利益が生まれます。人口減少の日本ではインバウンドは重要なマーケットです。しかしながら、同時に、観光客の増加によりキャパシティを越え、地域住民の不利益になる地域もあります。前期の活動で世界と地域、どちらも見ることでインバウンド観光の功罪を考えることができた、と個人的に感じました。今回得た知識を様々な人に伝えていくのがPATA 和歌山大学学生支部の役目と考えています。後期の活動も精一杯頑張ります！最後まで読んでいただきありがとうございます！

■ Kisssh-Kisssssh 映画祭 2018

岡田 青佳さん（学部3年生 / 香川県立高松桜井高等学校出身）

「海辺で愛とか恋とか言ってみた。」皆さんはめでたい電車でどこに向かいますか。細い路地を抜けるノスタルジックな街並みと海の波音が広がる町が終点「加太」です。昼間は快晴の青空、夜は美しい月が見られた2018年9月21日～23日の三日間、加太の町一帯で「Kisssh-Kisssssh 映画祭 2018」が開催されました。2017年から実行委員として、2018年は事務局長として運営に携わったことについて報告いたします。

私の出身は香川県高松市で、両親の出身は小豆島です。現在、香川県では「瀬戸内国際芸術祭」が三年に一度開催されていたり、週末には音楽イベント等が各地で開催されてい





ます。毎回参加することはもちろん楽しみなのですが、地域で開催されるイベントがどのように運営されているのか、裏側を知りたい、自分でやってみたくらいと思い。実行委員になることにしました。そこで企画力をつけて、自分で一つでも企画を実行すること、主体性をもって取り組むことを目標に参加しました。

一年目は、自分の役割を全うすることで精一杯で、先輩の姿を見ながら、流れを覚えていました。そんな中でも、「Kisssh Salon」という音楽と飲食を楽しめるスペースを砂浜に設ける提案を行い、準備まで整えることが出来ました。残念ながら台風の影響で実現には至りませんでした。雨天時の対応を臨機応変に行ったことや、周囲を見て自分ができる仕事をお手伝いすることで自己の成長につながったと思います。

二年目は、事務局長として映画祭というイベントの運営だけではなく、学生メンバーも多く所属する実行委員会の組織を運営することにも意識を向けるようになりました。現場スタッフ、実行委員会のチームワークの保持、それぞれの個性や能力に合わせた役割分担など、視野を広く持つことを意識できました。事務局長という立場では、チームを「引っ張る」のではなく、全体のスムーズな流れを作る環境にしていくことが組織運営になると思いました。

二年間を通して、実行委員のメンバー、監督さん・キャスト・スタッフのゲストの皆さん、全国各地から和歌山に集結した当日運営ボランティアの皆さんなど、たくさんの素敵な出会いに恵まれ、支えられ、モチベーションにもなりました。本当にありがとうございました。

■ 和歌山 お月見イベント 2018

梶田 太陽さん (学部3年生/和歌山県立橋本高等学校出身)



科学文化ゼミでは、毎年3年生が主体となって中秋の名月に「お月見カフェ」を開催しています。メインは様々な望遠鏡を覗いて月を楽しむ観月会で、同時にぶらくり丁商店街周辺のいくつかのお店を貸していただき、その中で様々な企画を行うイベントです。過去には店員が宇宙人に扮している宇宙人カフェ、宇宙をテーマにしたファッションショー、アート、お月見団子作り、プラネタリウムなど。毎年中秋の名月にぶらくり丁周辺で月を楽しみ、宇宙に親しんでもらうという目的で工夫・改善しながら開催しています。

今年中秋の名月は9月24日(月)。前日23日が祝日秋分の日で、その振替休日でもありました。また、同日に和歌山城西の丸広場で屋台村という飲食・フリーマーケットイベントの開催が決まっていたので、そことタイアップをしながらぶらくり丁にもたくさんの人を呼び込み、大規模なイベントにできるのではないかと見込み、まずは企画を考えていきました。次に企画案をもってぶらくり丁のお店に連絡し、場所・設備などを貸していただけないかと交渉。各所と協力関係を構築しながら、企画を具体化していきました。



月見は夜が本番です。午前中は屋台村にてブース出店とステージの出演を行い、お月見イベントの広報宣伝を行いました。毎年恒例の観月会では、クリエ天体継続観測プロジェクト・和歌山市立こども科学館の方に御協力頂き、望遠鏡で月を楽しめるようにしました。また今年初めての試みとして和歌山文化協会と協力して俳句会も開催しました。ですが当日は残念ながら月が雲に隠れてしまい、京橋に来ていただいた方には輝く『かに』のネオンサインを望遠鏡で楽しんでいただきました。お月見に欠かせないお月見団子作りや、ロケット作りではお子さんが夢中になっていたのが印象的です。尾久土先生のトークショーには観光学部を志望している高校生も来場しており、新たなターゲット層を発見できました。



今回のお月見イベントでは周りを巻き込んで大きなものにしようとはじめは意気込んでいましたが、実際関係者を増やすことはそれだけの責任、連絡、そして信頼関係やモチベーションが必要でした。楽しかったと無神経には言えませんが、チームで計画・実行していく難しさや、チームだからこそ分担・連携できる強みを実感しました。

御協力いただいた方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

■ 飯田フィールドスタディ

山崎 佑夏さん (学部1年生/大阪府立鳳高等学校出身)

私たちは、長野県飯田市で行われた飯田フィールドスタディに参加しました。8月17日から20日までの4日間、立命館大学、名城大学、東洋大学の学生たち、そして飯田市の高校生の方たちと一緒に、飯田市でたくさんのことを学ばせて頂きました。

聞き取り調査をさせて頂く団体(千代しゃくなげ会、橋北まるごと博物館研究会、橋北面白倶楽部、天竜川鷲流峡プロジェクト、南信州獅子舞フェスティバル実行委員会、国際りんご・シードル振興会)ごとにグループに分かれて3日目の報告会に向けて活動を行います。1日目はソーシャルキャピタルについて学び、また、ワークショップや公民館主事の方々のお話で飯田市のことをたくさん知ることができました。2日目はそれぞれのチームに分かれて聞き取り調査をし、報告会の準備として遅くまで原稿やパワーポイントを作ったり発表の練習をしたりとなかなかハードで一番大変な日でした。ですがその分とてもやりがいがあり、報告会を無事に終えることができた時には、同じチームの人たちと心から喜び合いました。私は千代しゃくなげ会で聞き取り調査をさせて頂いたのですが、飯田市千代地区の人々自らがまちの保育施設やデイケアセンターのために立ち上がり、地域の子供たちやお年寄りを地域でしっかり守ろうとしている姿勢や考え方に大変感動しました。また、自分たちのまちのために積極的に住民同士で話し合いを重ねたり、様々な場面で協力し合ったりするという、素晴らしいまちの在り方を教えてもらいました。最終日にはごんべえ邑で五平餅づくりや郷土料理を楽しんだり民泊先では心温かい家族に迎え入れて頂いて、一緒にBBQをしたり食事をしながらお話ししたり、日本の棚田百選の一つである、よこね田んぼに連れていってもらったりとたくさんの思い出ができました。一緒にお話する中で、短い時間でしたが、家族の一員になれたような気持ちになりました。飯田市で出会った全ての人たちが本当に人情味溢れる温かい方々で、かけがえのない出会いになりました。

地域活性についてこれからも学んでいきたいと考えている私にとって、住民たち自らの動きが活発な飯田でのフィールドスタディに参加できたことはとてもいい経験になりましたし、すべてが新鮮でした。また、他大学の上回生や高校生、和歌山大学の先輩の中に入って学べ、とても良い刺激になりましたし、仲良くなれて新しいつながりもできて貴重な活動となりました。フィールドスタディに参加できて本当に良かったです。



■ GIP (Global Intensive Project) ~ Alberta, Canada (Global Learning Activity)

杉本 梓さん (学部1年生/開智高等学校(和歌山)出身)

私は今年の8月末から9月末にかけて1か月間のカナダGIPに参加しました。私自身1か月間海外で生活するのが初めての経験だったので不安でいっぱいだったのですが、滞在期間は本当に充実していてあっという間の貴重な体験でした。今回は、「日常生活について」、「カナダの観光地を訪れて」、そして「私がこのプログラムから感じた事」の3点に分けてお話ししたいと思います。

まず日常生活については、私はホームステイをしながらアルバータ大学の語学学校に通っていました。ホームステイではホストマザー、その娘さん、そして3歳の孫までいて、いつも賑やかでホストシスターと一緒に遊んだり、ホストマザーと散歩に行ったり、本当にユーモアで溢れていて寛容な素敵な家族と過ごすことができました。ホストマザーはポーランド出身だったので、家ではポーランド料理をいつも食べてとても美味しかったです。また、語学学校へは自分でバスと電車で行っていました。初めは行き方も全くわからなかったのですが次第に慣れました。授業内容としては、日本だと高校生で習うレベルの文法を習い、プレゼンやクラスメイトとのスピーキングの練習、宿題もありました。私のクラスでは日本人が一番多かったのですが、他にベトナム、中国、メキシコ、エチオピアからの学生がいて、一緒にお昼を食べたり、カフェに行ったりして、授業最終日はみんなでお菓子を持ち寄ってパーティーをしました。日本に帰国してからもお互いに「寂しい」と連絡を取り合う仲になるほど、みんなと楽しいクラスで過ごし、友達の数も広がりました。

次に、カナダの観光地を訪れた時の経験について話します。私が訪れたのは世界遺産のロッキー山脈があるバンフと、世界三大恐竜博物館のある恐竜発掘の聖地ドラムヘラーです。バンフは本当に寒かったのですが、水が綺麗で青く見える湖でカヌーに乗ったり、湖畔を散歩したりとカナダの広大で美しい自然を感じることができた特別な旅でした。また、バンフの街中はお土産物店でいっぱい多くの観光客で賑わっていました。ドラムヘラーはホストファミリーに連れて行ってもらったのですが、ごつごつした岩は何層もの地層がはっきり見え本当に感動しました。また、博物館ではレプリカではなく本物の骨も多数展示していて恐竜好きにはたまりませんでした。

最後に、私がこのプログラムを通して感じた事は、まず自分から動いてみる事が大切ということです。語学学校で他の国からの留学生を見ていて思ったのは、日本人は文法の知識や語彙は優れているのに発言しないということです。他国からの留学生は授業を止めるほど先生に質問



したり、授業で発言したりします。そう思ってからは恥ずかしがらず他の生徒に負けないように自分から発言するように心がけたり、語学学校のクラスを出るまでは英語しか使わないと決めたり、自分で行動しました。このおかげで、他国からの留学生ととても仲良くなることができましたし、何も気にせず発言できるようになりました。また、家での生活でも、自分の部屋に籠るのではなく、1か月という短い期間だから少しでもホストファミリーと過ごそうと思い、宿題をみんながいる部屋でしたり、空き時間が少しでもあると、ホストファミリーと過ごす時間にあてました。そして、週末にホストファミリーと一緒にしたいことを自分から話すことでいろいろな場に連れて行ってもらいました。やはり1か月という期間はすごく短くて、ただ単に学校に行き家に帰るだけでも1日は過ぎていきます。でも、その1日をどのように濃くさせるかは自分次第だと思ったし、自分自身も積極的に行動したおかげでとても濃密なかけがえのない出会いがカナダで体験できたと感じています。この経験を忘れず、次にホストファミリーに会う時にもっと円滑に会話するために、これから英語を話す力をもっとつけていきたいです。

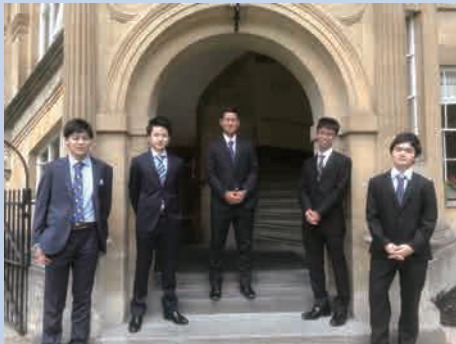
■ GIP (Global Intensive Project) ～ Oxford, United Kingdom (Global Learning Activity)

澤田 幸輝さん (学部2年生/兵庫県立加古川東高等学校出身)



「あなたはベジタリアンについてどう思いますか？」

私たちを担当されていた講師の方からの質問です。彼女は続けて、「私は日本人が大好きだけど、1つだけ許せないことがあります。それは、あれほど可愛くて知能の高いイルカやクジラを獲っていることです。」と、顔を真っ赤にして仰りました。この時、私は私自身の知識の浅さを痛感しました。私にとって“ベジタリアン”という言葉は、「動物肉を食べない人たち」という理解でしかありませんでした。しかし、実際はそう単純な話ではなかったのです。“ベジタリアン”という言葉の裏側には、動物に対する“哀れみ”や“慈しみ”ともいえる考え方があり、それが彼らの思想の根底にあるのです。しかし、この考え方は日本人のそれとは大きく異なるものです。日本人は、植物を含め、生ある全てのものに感謝するという考え方を持っています。そして、それらをいただくことによって生かされていると考えています。講師の方とのこの会話において、感じたことが1つあります。それは、異文化を完全に受け入れることが出来なくとも、理解しようと試みることの重要性です。グローバル化が進む今日において、また今後、観光に携わっていく私たちにとって、こうした意識の持ち方、また1つ1つの異文化に対して深く探究していくことは非常に重要なのではないかと思います。



「スコットランド、とりわけハイランドの氏族を表す伝統的衣装のタータン柄のキルトは(イングランドとの)合同後に創られ、注目されるようになった」(森 正人(2012)『英国風景の変貌 恐怖の森から美の風景へ』pp.188 里文出版)

上記の引用は、三重大学人文学部教授であり、和歌山大学にも来校されている、森正人先生が執筆された『英国風景の変貌』の中の一節です。森先生の講義内で上記のことを知り、非常に衝撃を受けた私は、実際にスコットランドのエディンバラを1人で訪れました。エディンバラは、中世の雰囲気を感じさせるような美しい町並みが広がっていました。同時に、各土産物屋では、多くのタータン・キルトが店の前に陳列し、それを身に纏いバグパイプを演奏する奏者の周りには、沢山の観光客が集まり写真を撮っていました。しかし、それはイングランド人によって意図的に創出された“スコットランドらしさ”を示すための伝統なのです。観光の目的が“本物”を観るための行為であるとするならば、タータン・キルトを観て楽しむことは、観光といえるのでしょうか？そもそも、“本物の伝統/創られた伝統”とは一体何なのでしょう？これから観光学を深く学んでいく私にとって、非常に刺激的で興味深い一日となりました。

私が Oxford GIP を通じて、最も印象に残っている2点をここで挙げさせて頂きました。当 GIP に参加した12人全員が、それぞれ異なる思い出を持っています。皆に共通して言えるのは、イギリスから“小さな気付きの種子”を多く持ち帰ったということです。そして私たちは、1つ1つを整理し、各々の庭にそれらを蒔く作業をしています。大学生活において、また社会に出た後も、それらの種子をゆっくり成長させ、花を咲かすことが出来るよう、その“小さな気付き”を“深い理解”につなげる取り組みをしていきたいと考えています。

最後に、素晴らしい体験を共有したメンバーの皆さん、そして快く参加を許可してくれた両親に心から感謝しています。

■ 地域インターンシップ Local Internship Program (LIP)

「農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証」
(岩手県胆江地方および和歌山県)

岡崎 菜摘さん (学部2年生/大阪府立富田林高等学校出身)

私たちの LIP では、実際に岩手県を訪れ数日間農家さんのお宅でお世話になりました。それぞれのお宅と一緒に、おいしいご飯を食べ、同じおうちで寝て作業も行いました。

今年は雨が多かったですが、作業は主に鎌での稲刈りでした。強い日差しの中、汗をかきながらぬかるんだ田んぼでの作業はすごく大変で、体中が筋肉痛になってしまうほどでした。でも、地域ならではのホンニョがけやきれいな稲穂の風景、刈り終わった田んぼを見るととても達成感を感じました。

また、受入農家の方々と学生の交流会では、お互いに思いを伝え合いました。農家ごとで生活スタイルや作物の種類や作業もさまざまなので、他の学生や農家の方の話もすごく興味深かったです。地域の課題でもある高齢化や人口減少、空き家の問題や移住者の受け入れについても話し合い、意見を出し合いました。住民の方々同士のつながりが温かくて強い分、新しい移住者の方が入るのが難しいところもあるのかなと感じました。すごく感じることが多い、濃い時間になりました。

このLIPで私は岩手県での生活はすごく『食』が身近にあると感じました。自分の手で収穫する喜びや大変さを体で感じ、食べ物を大切に思う気持ちがすごく強くなります。もちろん、食べる時のおいしさは何倍にもなり、とれたてや手作りのものを食べることがすごく贅沢にも感じました。普段の生活では、あまり考えずに過ごしていたことなのでこういう風に感じられる機会はすごく貴重なものでした。

いつも温かく受け入れてくださる農家の方のおかげで、今回のはじめての体験ができ、たくさんの方が学べる特別な時間になりました。実際に訪れたからこそ感じることもたくさんあったので、これから私たちがしっかり考えて、伝えていけたらいいなと思います。しっかり行動にもつなげていきたいです。



■ 地域インターンシップ Local Internship Program (LIP)

「世代間交流を推進する地域拠点の企画・運営（コミュニティカフェでの実践を通じて）」（和歌山県紀美野町）

今清水 花奈さん（学部2年生／広島県立呉宮原高等学校出身）

私たちにこ cafeLIP は、和歌山県紀美野町を起点に、学童やこ cafe 等への訪問を通して小さい子供からご年配の方まで幅広い世代間交流を行います。そして認知症という誰もがなりうる症状について認知症サポーター養成講座という講座を受講学習したのち、その経験を活かして子どもたちへ認知症という症状についての学びのサポートをするともに、子どもたちとご年配の方をイベント等を通じてつなぐような活動をしています。私は1年次からこのプログラムに参加していますが、学童やこ cafe の定例的なイベントはもちろんのこと、夏祭りやクリスマス会といった季節の行事や今年度から始まったキノコ食堂（紀美野子ども食堂）などにも参加しています。

8月24日（金）には、こ cafe にて学生6名で夏祭りに参加してきました。前日の台風の影響で実施できるかどうか不安でしたが、当日はなんとか天気も持ち、無事に行うことができひと安心でした。まずは子どもたちに、私たちが事前に考えておいた○×クイズを解いてもらいました。夏祭りということで、クイズのテーマを「夏」に絞り、子どもでもわかるものから、大人の方でも考えてしまうようなものまでいろいろなクイズにチャレンジしてもらいました。クイズに正解できて喜ぶ姿がとても可愛らしかったです。次に男の子チームと女の子チームに分かれて、交代でスーパーボールすくいと、手形で花火の絵を描く手形絵の工作にチャレンジしてもらいました。私は、スーパーボールすくいの担当でしたが、みんな真剣な顔つきでスーパーボールをすくおうと頑張っていました。中にはコツをつかみ、上手に30個以上すくう子もいて学生みんなで感心していました。すくえたスーパーボールやフィギュアはプレゼントということで喜んでもらえたので嬉しかったです。一方、手形絵の方も夜空を意識して用意していた黒い紙に子どもたちの可愛らしい大きさの手形で色鮮やかな花火が描かれており非常に良い作品になったと思います。その後は子どもたちからハンドベルで「きらきら星」の演奏と「ぼくのミックスジュース」や「シャボン玉」など計5曲の歌を披露してもらいました。子どもたちの人数は8人と多くはありませんでしたが、先生のピアノ演奏に合わせて一生懸命歌う姿に、学生である私たちはもちろんのこと、おじいさん、おばあさん方も癒されながら聴いておられてとても良い時間だったなと思いました。2～3時間という短い間ではありましたが、大学で夏祭りに向けミーティングを重ね準備をしていた分、子どもたちが楽しそうに活動していたり、日々の生活や出来事について話してくれたことが本当に嬉しかったです。また、子どもたちがクイズや工作に取り組んだり、一生懸命に歌を歌う姿を見守られ、いきいきとおられるご年配の方々の姿がとても印象的でした。

小さな子どもたちからご年配の方と、年齢問わず一緒に活動できることが本LIPのいちばんの魅力であると考えています。これからも世代間交流を通して様々な活動に積極的に取り組んでいきたいです。



Topics ー過去のイベントとニュースー

■「和歌山大学観光学部 ミニ・オープンキャンパス in 東京」 & 観光教育研究セミナー 2018 Vol.1 in 東京 / CTR Seminar Series 2018 in 東京 - Tourism and SDGs - 「スポーツ ツーリズム 3 ～メガイベントが日本社会を変える～」を開催しました！



ミニ・オープンキャンパス in 東京 の様子

2018年8月10日(金)、フクラシア品川クリスタルスクエア(港南口)3階会議室G(東京都港区)にて、「和歌山大学観光学部 ミニ・オープンキャンパス in 東京」、ならびに「観光教育研究セミナー 2018 Vol.1 in 東京 / CTR Seminar Series 2018 in 東京 - Tourism and SDGs - 『スポーツ ツーリズム 3 ～メガイベントが日本社会を変える～』(和歌山大学国際観光学研究センター主催、和歌山大学観光学部共催、スポーツ庁、観光庁、日本スポーツツーリズム推進機構、和歌山大学観光学部同窓会「飛耀会」、和歌山大学経済学部同窓会「柑芦会」東京支部後援)」を開催しました。

■ 2018年度・夏 GIP (Global Intensive Project) 合同報告会を実施しました！



2018年11月2日(金)16時30分より、2018年度の夏季休業中に開講されたGIPの4プログラム(Global Learning Activity / オーストラリア・カナダ・イギリス・フィリピン)の参加者による合同報告会を実施しました。

初めての試みとなるこの報告会は、GIPでの経験をあらためて振り返ることで、いかに今後の観光学部での学びやキャリアにつなげていくかという観点で実施され、各プログラムの参加者によるプレゼンテーション、グループディスカッションに加え、観光学部キャリア支援室の濱島教員からの講評をいただきました。

Future Events ー今後のイベント紹介ー

■ 2018年12月1日(土)開催! ～「和歌山大学観光学部 ミニ・オープンキャンパス in 東京」



関東圏の高校生や保護者の皆様、学校関係者を対象とした「ミニ・オープンキャンパス」を開催します。学問としての「観光学」に触れていただく模擬講義「観光とサステナビリティ」に加え、本学部での学びや国内外での様々な活動、そして進路等について、在学生ならびに卒業生が学生目線で紹介します。

「夏の和歌山大学で開催されたオープンキャンパスに参加できなかった…」「観光学部への入学を検討している」「観光学部のことをもっと知りたい!」などなど、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

当日のプログラムの詳細や参加申込方法などは、下記をご覧ください。

➔ <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2018101600140/>

■ 2018年12月6日(木)開催!

～学内公開講義「駐日シンガポール大使に聞く! 観光政策ーシンガポールの観光事情・観光政策」



2018年6月12日に行われた史上初の米朝首脳会談の開催地となったシンガポール。ルイ・タック・ユー駐日シンガポール大使をゲストスピーカーに招き、シンガポールの最新のMICE誘致や観光政策についてお話をうかがいます。

日時: 2018年12月6日(木)14時50分～16時20分

会場: 西4号館 T101教室

*本公開講義は、学内教職員・学生向けです。

編集・発行

(2018年11月発行)

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510
和歌山市栄谷930 和歌山大学西4号館 K216室、K116室
TEL/FAX 073-457-8553
E-mail tourism-er@center.wakayama-u.ac.jp
URL <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

和歌山大学 国際観光学研究センター

〒640-8510
和歌山市栄谷930 和歌山大学西1号館1階
TEL 073-457-7875
E-mail info-ctr@center.wakayama-u.ac.jp
URL <http://www.wakayama-u.ac.jp/ctr/>